

富士のさと ボランティア養成研修



令和7年6月14日（土）～6月15日（日） 1泊2日

○目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

○参加者（対象及び内訳）

対 象：ボランティア活動に興味のある高校生以上の
生徒・学生・社会人

参加者：計 39 名（申込み 44 名）
（内訳：男性 20 名、女性 19 名）
（高校生：17 名、大学生：18 名、社会人：4 名）



○事業の内容

（1）「交流の家について知ろう！」

（科目：青少年教育施設の現状と課題）

所長 藤原 一成

「青少年教育」「青少年教育施設」についてから始まり、中央青少年交流の家の誕生から業務内容まで幅広い内容を学んだ。青少年教育施設の教育機能や役割などについて知った。



（2）「青少年の“今”を知ろう！」

（科目：青少年教育）

常葉大学短期大学部保育科 教授 遠藤 知里 氏

まず、子供に関わる各種データを基に、子供たちを取り巻く環境を知った。その後、「子供たちがどうしてそのような行動をするか」を複数の事例を扱い話し合った。子供目線から考える視点を取り入れることで、子供に合った手立てを見つけることができることを学んだ。



（3）「ボランティアってなんだろう？」

（科目：ボランティア活動の意義）

ボランティアコーディネーター 西田 開智

ボランティア活動の意義を話し合いながら参加者同士で考えた。また、ボランティアとしての心構えや留意点について具体例を見たり聞いたりしながら理解した。



（4）「野外炊事をやってみよう！」

（科目：ボランティア活動の技術）

ボランティアコーディネーター 高垣 信宏

野外炊事を行うことで得られる効果を知り、参加者側、指導者側の視点を持って実践した。どのようにすれば火を起こすことができるかをグループごとに考えて取り組んだ。



(5)「先輩ボランティアの話を聞いてみよう！」

(科目：青少年教育施設におけるボランティア活動)

主任企画指導専門職 間瀬 哲章

当所法人ボランティア 8名

7名の先輩ボランティアの体験談を順番に聞いた。ボランティアをして良かったこと、大変だったことなどを聞き、青少年教育施設でボランティア活動を行うことの魅力などを知る機会となった。



(6)「子供たちを守るための知識を身に付けよう！」

(科目：安全管理)

次長 高瀬 宏樹

体験から安全を学ぶために、参加者自身が竹で箸を作った。そこから指導するときに注意した方が良かったことを話合った。また、安全について活動現場で求められることなどを学んだ。



(7)「アイスブレイクをやってみよう」

(科目：ボランティア活動の技術)

ボランティアコーディネーター 高垣 信宏

アイスブレイクを考える基本を知り、グループでアイスブレイクを考えるなどコミュニケーションの実習を行った。フィードバックをし合うことで、指導の難しさを知ったり、より良いものを作り上げようという意欲を高めたりした。



(8)「法人ボランティア制度について知ろう！」

(科目：青少年教育施設におけるボランティア活動)

ボランティアコーディネーター 川端 斗和

法人ボランティア登録制度について聞き、全員が登録作業を行った。また、法人ボランティアとして活動する際の注意事項や事務手続きについて確認をした。

《参加者の感想》

- ・みんなで考えたアイスブレイクを披露した後、良い点と悪い点を指摘してもらい、指摘してもらった点を改善して発表した時の満足感がすごかった。
- ・ボランティア活動について体験しながら深く知ることができ、自身の知識を増やせたことが良かった。
- ・先輩ボランティアさんに関わることでよりリアリティのあるボランティア活動を想像することができ、実際に体験しながら考えることでどこに注意すればいいか知ることができた。

《成果と課題》

- 今回はアイスブレイクに参加者がやってみるなど、インプットするだけでなくアウトプットすることを活動に取り入れた。ボランティアとして活動した際に、野外炊事で火起こしを支援することが多いので、薪をどのように組めばいいかななどをグループ全員で話し合いながら行った。こうすることで、火起こしのコツを知り、数名だけが体験するのではなく、全員が実践できた。
- 先輩ボランティアが活躍する場を多く設けた。そのため、参加者はその姿を見て、自分もそうなりたいという意欲を高めた参加者もいた。また、先輩ボランティアもたくさんの役割を体験することで、責任感を高めたり自分の学び直しになったりした。
- 様々な広報手段から反応があった。そのため、今回の広報を分析して次年度以降につなげていくことが必要である。また、近隣の高校からの参加は学校によって参加人数に偏りがあったので、直接広報に出向くことでより多くの参加者を獲得したい。